

ミニ・シリーズ：湿地の自然環境（2）

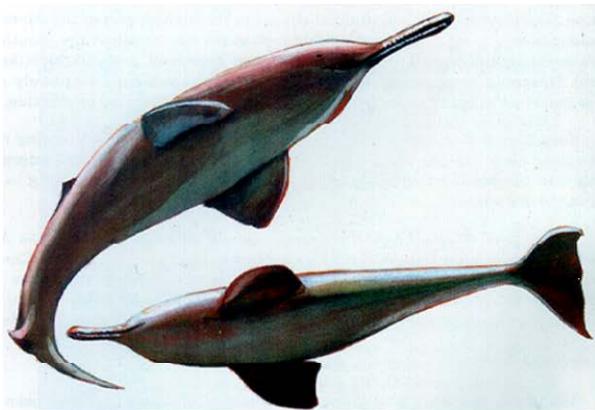
その2：パキスタンのインダス川

ヒマラヤに源流のある5河川がインダス川に合流し、北部山岳からデルタ地帯までインダス川はパキスタンの湿地の要となり、国内の総延長は2,900Kmに及ぶ。この流域には、北部の氷河の作用による湖沼、インダスデルタの氾濫源、河口のマングローブ林、干潟等様々なタイプの湿地環境が存在する。これに加えて、世界で有数の灌漑システムの建設に伴う水環境の変化の影響でできた湿地や湖、池なども存在している。政府はこうした湿地の重要性を早くから認識し、1960年代から積極的に保全政策を発展させてきた。

タウンサ堰周辺地域は1983年から野生生物保護区域に指定されており、総面積は6,571haに及ぶ。本保護区域に生息する最も貴重な生物種はインダスカワイルカであり、野生生物保護法の下でも保護が義務づけられている。このイルカはダムや堰堤によって個体群が分断されたり、ダムや灌漑システムの建設で乾期に水量が減少したりしてその生息が脅かされており、現在の総個体数は1,000頭以下とみられている。そのため、このイルカの保全にはかなりの努力が払われており、1976年付けでIUCN（国際自然保護連合）のレッドデータブックに、絶滅の危機に瀕する生物種としてリストされた。さらに、CITES（ワシントン条約—絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）にも登録されている。

この他に灌漑システムの湿地に対する悪影響としては、農業や産業廃液による水質汚染、河口における淡水供給の減少がマングローブ林に及ぼす悪影響などが挙げられる。また、定期的な洪水が制御されたことによる河岸性森林の喪失と生物多様性の喪失も大きな問題となっている。灌漑システムは、このように環境を悪化させている一方で好適な環境も作り出している。インダス川のダム湖や貯水池は、稀少な水鳥の越冬地や繁殖地、あるいは鶴の飛来地として極めて重要である。鳥類では、採食は干潟などの開けた環境で、営巣はマングローブ林で行うとうように、いくつかのタイプの湿地がシステムとして存在しなければならない種も多い。

このように、湿地に生息する貴重なある種の生物の保護は、湿地という脆弱な生息環境としての生態系そのものを保全することによってのみ達成することができる。つまり、これらの生物は、生態系保全のための環境指標となり得る。灌漑システムの発達に伴って育まれてきた湿地生態系を守ることは、取りも直さず豊かな人間生活を守ることに他ならない。環境指標となる生物のモニタリングを継続的に実施することにより、豊かな生態系をよりよい方向に発展させて行く努力を続けたいものである。



インダスカワイルカ



豊富な鳥類